

Title	シドニー・ウェツプ夫妻、その生涯と業績：英国社会史の一断面
Sub Title	Sidney Webbs and their work : a phase of British social history
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.1 (1952. 1) ,p.26- 46
JaLC DOI	10.14991/001.19520101-0026
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# シドニー・ウエツプ夫妻 その生涯と業績

—英國社會史の一断面—

飯田 鼎

「すぐれた人間の思想のあとをたどることは、最も興味深い學問である。」

—ブリンキン—

- 一、プロローグ
- 二、ベアトリクス・ポッター
- 三、わが修業時代
- 四、シドニー・ウエツプ
- 五、われらが協同生活
- 六、救貧法改革運動
- 七、第一次世界大戦と英國労働黨
- 八、ソヴェート旅行
- 九、エピローグ

自叙傳といえは經濟學を學ぶわれわれは、まずジョン・スチニアート・ミルの自叙傳を想い浮べるであらう。まことに、「さまよえる經濟學者」ミルの自叙傳は、彼が十九世紀前半か

ら後半にかけての社會的思想的な激動の中に生きた人であるだけに、今もなお捨てがたい魅力をもっている。しかしながらミルの自傳に限らずおおよそすぐれた人の自叙傳は、それがひとりその人の「魂の成長の記録」であるのみならず、實に讀者に彼が生きたその時代の、その社會の息吹をみじかに感じさせ、その當時の人々の關心が何にそがれていたか、そしてかれらの喜びや悩みが何であつたかを、まざまざとよみがえらせる點において一つの社會史的な意味をもっている。それ故にすぐれた人の自叙傳はたんに文學的な興味の對象であるばかりでなく、ひろく社會科學に志す人々にとつて重要な意味をもっているのではなからうか。

ロバート・オーエンの自傳や河上肇自叙傳、更にゲルツェンの「過去と思索」を讀む者は、社會主義者として、自由主義者としてのかれらのはげしい熱情と奥深い思想に接するであらうし、またフランクリン自叙傳や福翁自傳に見られる獨立と克己の精神は、何よりもわれわれに初期資本主義時代におけるたくましい人間像を想わせるであらう。このように考えるとき、ベアトリクス・ウエツプの自傳「わが修業時代」と「われらの協同生活」とは二人の偉大な個性の生活の歴史であるばかりでなく、英國社會史の一断面を描いたユニークな勞作である。言うまでもなくベアトリクス・ウエツプは、フェビヤン社會主義の指導的人物であり労働黨のすぐれた頭脳であつたシドニー・ウ

エツプの夫人である。筆者は、半世紀にわたつて英國國民の社會的政治的な思想と行動の上に、まれに見る強い影響をあたえたウエツプ夫妻の生涯を、この二冊の自叙傳を中心に考察してみたいと思ふ。

(註) ウエツプ夫妻の傳記として一般に知られているものはかれらの生前に書かれた Mary Hamilton 女史の Sidney and Beatrice Webb, 1942 であるが、その死後かれらと親交のあつたマーガレット・コール夫人によつて、最も包括的な傳記がまとめられた。(Webbs and their work, 1950 edited by M. Cole) 又コール夫人の Beatrice Webb, 1945 もすぐれたものである。そのほか R. H. トーニー教授によつて刊行された Obituary of Beatrice Webb もあると聞いているが、入手することができなかつた。

## 二

ドイツ人がウィルヘルム時代を口にし、英國人がヴィクトリヤ時代にふれるとき、ある者は嘲笑しある者は稱讃するといふが、いづれにせよ二十世紀後半の不安と激動の中にあるわれわれにとつて、その時代は平和への郷愁とはるかなあことがれとを感ぜしめるかもしれない。一八三七年にはじまるヴィクトリヤ時代は、いわば英國資本主義史上における開花期であつた。先進資本主義國として既に産業革命の苦悶を克服しつつあつた英

シドニー・ウエツプ夫妻の生涯と業績

國は、一八五〇年代に入るや、その母胎にはなお幾多の矛盾をはらみながらも、「世界の工場」としての地位を確立することができた。一方巨大な富の蓄積と貧困の堆積の中に悩み來つた英國は、ヴィクトリヤ時代によりやくその相對的な安定期——不安定の中の安定期——に入ることができたのである。チャーチスト運動が衰えた一八四八年から十年間、一八五七年の恐慌までの期間はいわゆるヴィクトリヤ黄金時代のはじまりであつた。一八六六年・一八七三年・一八九〇年と周期的におしよせる恐慌は、エンゲルズの豫言に反してプロレタリア階級をして革命にみちびく程致命的なものではなかつた。資本主義は未だその青年期にあつた。従つてその矛盾は現代ほど深刻な様相を呈して現れなかつたし、資本主義の「落ち穂」は當時の労働者階級をうるおしていた。まことにそれは社會の青春が第三階級の青春と一致していた時代であつた。

このようなブルジョア階級にとつて、いわば祝福されたヴィクトリヤ時代の最盛期、一八五八年一月三日、ベアトリクス・ポッターはグロスターから程遠からぬスタンディッシュ・ハウスに、當時西部大幹線鐵道の取締役であつたリチャード・ポッターを父として呱呱の聲をあげた。母はロレンス・ヘイワースの娘ロレンシナである。わがベアトリクスを生んだポッター家には、その當時最も普通に見られた産業家的精神がみ

ち溢れていた。曾祖父ジョンは富裕な呉服商人であり、祖父リチャードは救貧法改革運動に熱心だった急進主義者であつて、その死後莫大な遺産をベアトリスの父のためにこしたと伝えられている。又ベアトリスの母ローレンシスは儉約と質素とを重んずる婦人で、九人の娘と二人の息子とを育てるためになみなみならぬ苦勞をおこななければならなかつた。

九人姉妹の中の八人目に生れたベアトリスは性來病弱であり、神経質であつて、母が家事に忙しかつたためかほとんど顧みられなかつた。また母もベアトリスを最も智能の低い娘であると言つたといわれる。しかしながら病弱の故に正規の教育をうけなかつたベアトリスは、忠實な婢マルタ・ジャクソンの愛情によつてその少女時代を比較的愉快にすごすことができた。彼女の性格とこのような家庭の空氣はベアトリスを内省的にしたことは疑いえない。しかし彼女はその父母を最も敬愛した。特に父の母に對する態度の中に父の婦人を尊ぶ氣持を見出し、ひそかな敬意をおぼえた。最愛の一人息子を失つた父は、その愛情のすべてをかたむけて娘たちの幸福を願つた。娘たちが社交界でそれぞれ良縁をえることができるために父は金銭を惜しまなかつた。唯一の心配はベアトリスであつた……

(註1) Margaret Cole; Beatrice Webb, 1945, P. 10.  
(註2) ベアトリスは一人の弟と八人の姉をもつていたが、弟は若くして死に、又八人の姉妹の消息については余り

ふれられていない。

(註3) Beatrice Webb; My apprenticeship, P. 58.  
(註4) op. cit., P. 58.

三

ヴィクトリア時代における資本家的精神の典型的な具現者であつたベアトリスの父は、又その事業の餘暇にダンテやシェイクスピアやプラトニーを愛讀し、フランスのエンサイクロペディックやサッカーを讀むことを忘れなかつたし、エドモンド・バークやカーライルやヘンリー・ニューマンなどの讚美者でもあつた。そして功利主義の思想的背景のもとに人となつた母の感化もあつて、ポッター家の思想は必ずしも保守的ではなかつた。とりわけハイバート・スペンサーのベアトリスの父との生涯にわたる交友は、ベアトリスにも強い感化を及ぼしたことは想像に難くない。われわれは今ここでスペンサーが哲學史上において占める地位について詳しくふれる餘裕はないが、要するに彼の偉大な功績はすべての現象に通ずる眞理として「進化の法則」を明らかにした點にあつた。この哲學者と日夜友達のように接することによつて、ベアトリスは我々の認識がみな相對的であるという不可認識論を教えられ、これよりして科學と宗教との斗争がみちびき出されることを知つた。スペンサーの一弟子となつてその教をうけたベアトリスは、實に「眞

理をではなく諸事實の適應性」を學んだ。後に社會科學者としての彼女のすぐれた判斷力推理力をして事物の適確な理解は少女時代以來多くの哲學者に負うていた。しかしながらこのようなスペンサーへの傾倒にもかかわらず、ベアトリスは彼に對して人間的な親しさを感じられず、この孤獨な哲學者にやどるベジミズムと悲壯觀とは、屢々彼女にあわれみを感じさせたこと、そして反對に彼の論争者であつたハックスレーに人間的な親しみをもつていたことをその日記に書いてある。また十六才のとき父とともにアメリカ合衆國を旅行しそこで大病にかかつた彼女は、すでに自らの信條を求めていただけに、これを機會として深い自己反省をせまられるに至つた。ファウストを讀んでグーテの求道的な態度にうたれ、無意識のうちにその信條たるべきことを主張してきたキリスト教の權威に對し、疑惑の眼を注ぎはじめた。

だがキリスト教への疑惑はスペンサーの「第一原理」を讀むことによつて益々深められてゆくのであるが、これは又當時のブルジョア社會に支配的であつた快樂主義への反感と相まつて、ベアトリスをやるせない煩悶におとし入れた。「われわれの日常生活の表面の下には、肯定する自我と否定する自我との間にたえまない論争が行われている」とは彼女の偽らぬ實感であつた。やがてベアトリスは福音主義者ジョージ・エリオットと知り合い、キリスト教への疑惑をときその眞の姿を把握し

シドニー・ウェツプ夫妻の生涯と業績

二九 (二九)

ようとした。しかし既に自然科学的世界觀の洗禮をうけた彼女にとつて、キリスト教が一つの非合理主義として意味をもたなくなつたのは當然である。周圍にあるすべてのものを理解しようとおせる彼女の知識慾は、ついに佛教にまで及んだ。そして佛教書に親しんで以來ベアトリスは更にキリスト教への不信を強くしたのであつたが、佛教それ自體に對しても何かしら飽き足らぬものを感じた。すべてを自己否定と諦念に歸せしめる東洋的な態度は彼女にとつて耐え難かつたのかもしれない。少女時代におけるベアトリスの思想的な推移をたどることは、思想史を學ぶ人々にとつて興味深いが、要するに宗教的な熱情の冷却と自然科学的世界觀の勃興とは、一個人の問題よりもその當時の時代精神の一つのあらわれにすぎなかつた。そしてこの自叙傳の至る所に見出されるベアトリスの苦悶の叫び、傳統への反抗はこのような時代的背景においてのみ理解することができよう。

一八八三年二十五才になつたベアトリスは社會探究者としての決意をかためながら次のように云つてゐる。「おそろくは人民の社會的な状態へのこの新鮮な關心は、智的な好奇心や博愛心によるものではなくして、むしろ新に解放された民主主義のいわれないおそろしさによるものであらう」と。やがて慈善組織委員會の一員となつてロンドンの貧民街をたずねた彼女は、そこで階級としての賃金労働者層の赤裸々な姿にふれるこ



とができた。ヴィクトリア時代の初期にあつては、労働とは極めて抽象的に解釋され、「水が豊富なるが如く労働もおとなしく」(Water Plentiful and Labour docile)の考え方が支配的であつた。だが一八七九年から一八八五年に至るはげしい労働運動の中に、支配階級は労働がもはや單なる抽象ではなく、それは何よりも多くの休むことなき自己肯定的な且つ損失をつくり出す存在であることを知らねばならなかつた。そして自由保守兩黨に對する人民の信頼がうすれ、又支配階級の良心的な一部の人間に「罪の意識」が生れはじめたとき、ここにブルジョア急進主義者があらわれた。チャールズ・ブリスとジョセフ・チェンバレンとは實にその代表者であつた。ベアトリスはチェンバレンによつて急進主義の洗禮をうけたが、しかし彼女の科學的な探求心をよびさまし、これに熱い息吹をふきこんだ者こそほかならぬチャールズ・ブリスであつた。リヴァプールの富裕な商人であり船主であつたブリスは政治的には自由黨急進主義をとり、又宗教的信念においてはユニテリアンであつた。そしてオーギュスト・コントの實證主義に心酔し博愛主義の信奉者であつた彼は、社會問題をもつて何よりも「貧困」の問題であることを知り、その探求の中にこそブルジョア急進主義者としての自己の使命が存することを理解した。彼はチャールズ・ダーウインやフランシス・ガルトンのような天才的な人物ではなかつたにしろ、その鋭い感受性・冷靜

な批判力をして又旺盛な知識欲とはやがてロントリーやベル夫人などの先驅者たるにふさわしい風格をそなへていた。チャールズ・ブリスの生涯とその事業については既にその夫人によつて詳細な傳記がまとめられておりここにふれる必要はないが、ブリスの統計的な研究と科學的な方法論とが、劃期的なものであり、従つてその當時の人々に重大な影響を及ぼしたことは想像に難くない。一八四一年から一八八一年に至るまでの四十年間の統計を綿密に調査し、これを基礎としてロンドン東端地区の人民の生活を實證的なあらゆる手段を用いて探求したブリスは、やがて大著「ロンドンにおける人民の生活と労働」(The Life and Labour of the People in London, 1889)を完成したが、その當時ベアトリスも三つの論文を發表してゐた。だがブリスの協力者として社會問題に良心的な關心を抱きはじめたころのベアトリスは、その進歩的な合理主義にもかかわらず、社會主義を空理空論であるとする保守主義者であつた。従つて一八八〇年のベアトリスにとつてはフェビヤン協會の指導者アンニー・ベザント夫人の神秘主義もマルクスの労働價值説も何ら選ぶところがなかつた。その當時彼女は既にアルフレッド・マーシャルの援助のもとに協同組合運動に興味を抱いた。だが「消費者のデモクラシー」の機關としての消費組合については多くの關心を拂つていたけれども、協同組合運動が生産の面に入ると獨立生産者の團體の力をもつては

不可能であることを知つていた。

しかしながらブルジョア階級の家庭に生れ資本家的精神のなかに育つたベアトリスをして、やがて社會主義者としての自覺を促したものは、一八八九年をピークとして展開されたロンドンのドック・ストライキであつた。われわれの周圍におこる事件は、われわれの思想の上に重大な影響を與えるからであるよりも、むしろわれわれの心にある潜在的なものを顯在的なものにもち來らすが故に重要な意味をもつていとすれば、一八八八年アンニー・ベザント女史の指導と激勵によるマツチ女工のストライキ、ガス従業員のストライキ及びトム・マンとジョン・ペインズによるロンドンのドック・ストライキは、彼等が窮乏と抑壓の中にうち棄てられていた不熟練工であつただけに、そのかつてない勝利は當時の人々の耳目をこれらの人々にひきつけるとともに、不安と希望の入りみだれた感情が知識階級の心に流れた。

「わが修業時代」の最後を飾る「私は何故に社會主義者となつたか」の一章は、ベアトリスが三十才から三十四才に至る間の思想的な遍歴のあとをたづねている。アダム・スミスの國富論とロカードの經濟學とを讀んで、經濟學が社會科學の上に占める地位がいかに重要であるかを認識した彼女は、やがてウィリアム・トムソンやトマス・ホヂスキンのどのいわけゆるりカード派社會主義者よりして、カール・マルクスの労働價值

説が現代社會にもたらす影響を考察した。一方チャール・ディケンズ、カーライル、ラスキン、ウィリアム・モリスの耽美主義と、ジョン・スチュアート・ミルやヘンリー・ジョージをして又アインホルト・トインビーの社會改良主義、これら多くの思想はベアトリスの身邊にせまつてその權威を主張した。しかしながら何と言つてもベアトリスの心をひきつけたものは、マルクスの労働價值説とマーシャル教授によつて教えられたジェヴォンズの限界効用の理論であつた。マルクス主義の根底をなす唯物史觀が、ミル・コント・及びスペンサーによつてつけられた倫理的進化主義と相容れなかつたにしろ、その動態的な世界觀と革命的な熱情とは深く彼女の心をとらえた。だがそれならば何故にマルクスよりもオーエンを、労働價值説ではなくして限界効用の理論をとらねばならなかつたか。けだしヴィクトリア時代における協同組合運動のかつてない發展は、階級斗争よりも協同の理念をうえつけ、ヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」は剩餘價值説よりも土地單稅論を絶叫したからではなかつたか。ミルとスペンサーの著書を愛讀し、チャールズ・ブリスの強い影響をうけながら、その良心的な限を社會問題にそそぎはじめた當時のベアトリスは、わづかにブルジョア急進主義者であつた。しかしながらマルクスよりジェヴォンズへの努力と労働組合運動への關心は、ベアトリスを次第に社會主義者たるべく運命づけるに至つた。そして労働組合運動の研

究を通じて彼女に大きな影響を及ぼしたものはシドニー・ウェ  
ッペンであった。筆者は次に「われらの協同生活」の他の一人  
シドニー・ウェッペンについて語らねばならない。

(註1) My apprenticeship, P. 14.

(註2) *ibid.*, P. 23.

(註3) *ibid.*, P. 28-29.

(註4) 「わが修業時代」の序文の最初の句。

(註5) ベアトリスは次のように言っている。「ロンドン  
社會の快樂の世界にかこまれた資本主義の牙城の中に住んで  
いて、私は人間の個性が私自身の意識の中に働き、もしくは他  
人の行動の中に働いていようと、とにかくそれを信じなかつ  
た。しかも佛教とヒンズー教とは私を改宗せしめたのではな  
い。わたしがキリスト教から離れたというだけにすぎない」  
と。

(註6) *ibid.*, P. 150.

(註7) マーガレット・コールは「當時二十四才であつたベ  
アトリスが二十才も年上のチェインバレンと戀におち、彼  
の三度目の妻となる機会をもつたが實現しなかつた。」と言つ  
ているが、ベアトリスが彼から思想的に大きな感化をえた  
ことは事實である。M. Cole; Beatrice Webb, 1945.  
P. 24.

(註8) Charles Booth—A Memoir, 1918.

(註9) ナチヤク The Tailoring Trade of East Lon-  
don, Pages from a Workgirl's Diary, The Lords'  
Committee on the Sweating System p. 80.

(註10) その成果は The Co-operative Movement in  
Great Britain, 1891 p. 80.

(註11) *ibid.*, P. 396.

四

シドニー・ジェームス・ウェッペンは一八五九年七月、ベアト  
リスよりおられること十八ヶ月にしてロンドンに生れた。シ  
ドニーはベアトリスとは異つてむしろ中産階級以下の出身  
で、彼の母は、結婚前ロンドンのリースター區クランボーン  
街において婦人用品の小賣店を営んでいた。そして一八五四  
年、當時會計士であり教區委員であつたシドニーの父と結婚し  
たのである。三人兄妹の中の二男に生れたシドニーはいわば生  
粹のロンドン兒であつた。シドニーが英國の多くの急進主義者  
や人道主義者を生みそして育てた嚴格な宗教的な空氣の中に生  
れずに、ロンドンの商店街に人となつたという事實は、ベアト  
リスと比較して興味深く感ぜられるが、これがやがて彼の思  
想に重要な關係をもつに至つたことは疑いえない。自らの眼を  
もつて觀察し廣告や飾窓にかざられた書物を通じて讀むことを  
知つた彼の教育は自由でしかも實際的であつた。

シドニーは少年時代私立中學校に通い、後に十五才になるま  
でドイツ及びスイスの學校に學んだことは、彼にドイツ及びフ  
ランスに對する理解を深めさせ、語學の知識を養わせるに役立  
つた。十六才にして早くも自ら生活の資を得なければならなかつ  
たシドニーは、夜間大學に通いながら勉學をつづけた。そして  
その豊富な語學力のおかげで一八七八年公務員公開試験に拔群  
の成績で及第するや軍事省において二等書記となり、間もなく  
一等書記となつて植民省に轉じた。しかしながら一官吏となつ  
たとはいへ、彼は決して研究をやめようとはしなかつた。彼は  
ここでベアトリスとの婚約前一八九一年のはじめまで十三年  
間にわたる官僚生活を送つたのであるが、自叙傳を書くことを  
いさぎよしとしなかつたので、ベアトリスの場合と異つて興  
味あるエピソードはあまり知られていない。だがシドニーは生  
れつきおどろくべき記憶力、一つのことに関係あるあらゆる事  
實を系統的に覚えるすぐれた才能を有し、無駄に讀書せず、又  
最も適切に事物の本質を把握する鋭さをもつていた。

一八七九年シドニーはゼテティカル協會に加入したが、そこ  
で戦斗的な青年ジョージ・バーナード・ショーと知り合つた。  
そしてそのときショーはシドニーの印象を、「ナポレオン三世  
に似た相貌をもつ男」であるとユーモラスに語つたといわれる  
が、實にこの時から彼等の生涯にわたる交友がはじまつたので  
ある。ゼテティカル協會はミルの思想に重大な影響を與えられ

シドニー・ウェッペン夫妻の生涯と業績  
三三三 (三三三)

たが、ショーとウェッペン、更にフェビヤン協會の重要な一員で  
あつたところのシドニー・オリヴィアとグラハム・ウォーラス  
の加入によつて彼等の間に共通の感情が生れ、特にショーの  
ヘンリー・ジョージからの社會主義的な熱情はついに一八八五  
年ウェッペンを勧誘してフェビヤン協會に入會せしめた。ここ  
にフェビヤン協會の後年の陣容はなつたのである。英國労働黨の  
ブレイン・トラストとなつたわがフェビヤン協會の歴史につい  
ては、かつてその一員として活躍したエドワード・ブイスの名  
著「フェビヤン協會史」(The History of the Fabian Soci-  
ety, 1925)が廣く讀まれているが、簡単にふれることとする。  
一八八〇年代倫理學者トーマス・ダヴィッドソンによつて創  
められた啓蒙的な團體、「新生活の友の會」(“Fellowship  
of the New Life”)がやがてフェビヤン協會となつたが、  
それは當初どのような性格をもつていたか。その綱領に見られ  
る「精神的なものへの物質的なもの從屬」が意味する理想主  
義人格主義であつたことは想像に難くないが、ロバート・オー  
エンの傳記者として有名なフランク・ボドモアやオーエンの孫  
娘デル・オーエン嬢などがその初期の指導者であつたことを  
思うとき、オーエンの「新共同體」の思想がなお強い影響を與  
えていたことは事實であらう。しかしながら當時のフェビヤン  
協會は必ずしも思想的な統一性をもつ社會主義團體ではなかつ  
た。成程ショーやウェッペンなどの努力が次第に實を結びつつあ



つたとはいえ、およそ主義と思想なるものを明らかにもたない人々が多かつた。まさにペンサムの功利主義を中心として個人主義と團體主義とが混然としていたからである。とりわけフェビアン協會はその會員のほとんど全部が中産階級の出身であつた點において、その當時の社會民主連盟や社會主義者同盟と異なる特色をもつ。従つてその初期においてはそれはあくまでも中産階級であつた。ウェツプの絶倫な精力と稀に見る勤勉、バーナード・ショアの文學的な教養と冷静な批判力とは、人々に社會主義の何ものであるかを知らしめ、フェビアン協會を社會主義の方向に導く決定的な力となつた。しかしフェビアン協會が眞に英國社會主義運動のバイオニアとしてその基礎を固めるためには、今までの同志であつた社會民主連盟のマルクス主義と訣別し、更にウィリヤム・モリスによつて代表される無政府主義的な思想を排除しなければならなかつた。そしてこの事實の中に英國社會主義の傳統的な色彩がよくあらわれている。

さてシドニー・ウェツプは自己の現存社會制度の實證的な研究を「ソシオロジー」と稱し、經濟學的な研究だけでなく廣く政治學の部門にまで及んだ。又ベアトリスは協同組合運動から労働組合の研究に進んで、ここにシドニーを知つたのであるが、この當時既に若い二人の心の中にはやがて大著「労働組合運動史」を完成しようとする計劃が著々とすすめられていた。だがその前に何よりも彼等の終生の協同生活の基礎が、いかに

して固められたかを知らねばならない。

- (註1) M. Hamilton; Sidney Webb, 1932, P. 18.
- (註2) Ibid, P. 15.
- (註3) M. Cole; Beatrice Webb, P. 47.
- (註4) 一八八〇年代の英國において、ハンリー・ジョージの「進歩と貧困」が與えた反響がいかに大なるものがあつたかを、シドニー・ウェツプは次のように書いてゐる。「もしわれわれが新思潮の出発點をある一つの事件に歸するとすれば、われわれは一八八〇年から八二年に至る『進歩と貧困』の英國における廣い流布をあげねばならない。英國の労働運動が當時おち入つていた満足せる靜觀主義と對象的に、この書の樂天的なしかも攻撃的な調子と地代論の普及の力は、新組合運動と同様に、英國社會主義運動の支配的な特徴をひびかせた」と。Webb; History of Trade Unionism, 1920. Pp. 875-876. 更に、ロバート・ブラッチフォードの雜誌「ソサリオン」の力も大きかつた。
- (註5) フェビアン協會の歴史については、このほかに次の著作が注目に値する。
- G. B. Shaw, Early history of the Fabian Society;
- G. D. H. Cole; The Fabian Society, Past and Present; M. Cole, Fabian Society over sixty years.
- (註6) フェビアン協會の背景となつた十九世紀英國思想史

については、次の二著が古典的である。Webb; Towards social democracy, 1916; A. V. Dicey; Lectures on the relation between Law and Public opinion in England during the 19th century. 1926.

五

バーナード・ショアはシドニーとベアトリスとの結婚が當然豫知しうるものであつたとして興味深く物語つてゐるが、しかし彼等の結婚がまさにおこした話題はけだし豫想以上のものがあつた。すなわちシドニーが無名の青年であり、何よりも社會主義者であつたために、ベアトリスの知己であつた多くの人々はこの結婚に賛成しなかつた。容姿端麗で理智的なベアトリスに對して、丈が低く風采の上らぬシドニーはふざわしく見えなかつたからである。とりわけチャールズ・ブリスとスベインサーの打撃は大きかつた。彼女の従兄であり、又恩人でもあつたブリスは絶交を宣言し、またやがて自分の死後傳記を書いてくれることをベアトリスに期待したスベインサーの希望は、これによつて無残にもうちひしがれてしまつた。それにもかかわらず彼等は幸福であつた。ベアトリスの父の死後一週間たつて彼等の婚約は發表された。そのときベアトリスは喜びに溢れて次の如く言つてゐる。「われわれは今人生の盛りにあつて健康にめぐまれている。われらは終ることのない交友生活を

シドニー・ウェツプ夫妻の生涯と業績

愛すること、奇妙によくきづき上げられてゐることがわかつたところの信頼を感じた。われらは同じ信條を共に持ちその上同じ仕事をして来た……私は日記にやがて結婚となる婚約について記録した」と。このときから彼等の協同生活ははじまつたのである。ときにシドニーは三三才、ベアトリスは三三才であつた。

ウェツプ夫妻の結婚にまつわるエピソードについて詳細にわたることは筆者の目的とすることではないので省略することとする。一八九二年に結婚した彼等は、その蜜月をダブリンの労働組合を研究することについてやし、新居をグロスビーナー街四一番地に定めた。ここは決して愉快な場所ではなかつたにせよ、比較的閑靜であり、特にロンドン州議會に近いのが便利であつた。そしてここで一八九四年最初の「労働組合運動史」がなしとげられたのである。だが労働組合運動の研究に全力をあげて従事してゐた當時、彼等は地方政治への關心を忘れなかつた。結婚の年ロンドン州議員に當選したシドニーはすでに都市社會主義、すなわち「ガスと水道の社會主義」の信奉者であつて、それはまたフェビアン協會の方針でもあつた。社會主義實現の哲學として漸進主義をとつた彼等が、國家社會主義への一段階として都市社會主義に注目したのは興味深いが、ここにシドニー・ウェツプその人の實踐的な性格をうかがうことができる。

それのみではない、ウェットプが實踐家であり、すぐれた教育者でもあつたことはロンドン州技術教育委員としてのたゆみない努力によつて明らかである。社會科學としての經濟學が現存社會機構をときあかす武器であることを認識した彼は、ロンドン大學において經濟學の研究と教育とがいかに輕視されているかを見て驚いた。そこでウェットプ夫妻はロンドンのこの經濟學的無智を救うために政治經濟學の新しいカレッジを建設することを志し、自由黨の指導的人物で哲學者であつたホールデイン卿の援助をえてゆくゆくはこのカレッジがロンドン大學の一部となることを承認させた。一方ウェットプ夫妻は一萬ポンドにのぼる建設資金を募集するためにみなみならぬ努力をかたむけ、又教師や學生たちを招待すること數百回に及びそのカレッジはウェットプ夫妻の愛兒として育てられたことは有名な話であるが、しかし彼等はこれを以て社會主義の喧傳の具とするようなことはなかつた。一八九八年シドニーはホールデインとともにロンドン大學法の通過のために運動したが、これはやがて一九〇二年のバルフォア教育法となつて實を結んだ。このようにして地方政治への關心は初等教育の改制運動にまで及んだが、しかしその間労働組合の理論的な探求をゆるがせにしたのではなかつた。すなわち一八九七年、労働組合運動史の姉妹篇「産業民主主義」が世にあらわれたのであつて、その構想の獨創的なこととしてその規模の雄大なることは類書にその比を求め難

く、今もなお古典としての地位を堅持している。さて「産業民主主義」を完成したかれらは、一八九八年カナダ、アメリカ合衆國に六ヶ月の旅をこころみ、近代的なデモクラシーの姿にふれようとした。そして多くの會合に出席して興味ある資料を得たけれども、それは必ずしも重要ではなかつた。傳記者マイケレット・コールは、カナダ及びアメリカへの第一回世界旅行をもつて彼等の協同生活の第一期は終つたと言つているが、これからのべる救貧法改革運動は、彼等の協同事業の中で最も大なるもの一つであつた。

(註1) ショーは次のように言つている。「シドニーがある婦人との失戀の苦惱から恢復したとき、彼はしばらくは感情に動かされなかつた。そのときベアトリスがあらわれたのである。彼女は週末にはフェビヤン協會員を一人一人グロスターに招いて、全く熱心に夫となるべき人を求めてテストをした。だがわたしはことわつた。というのはシドニーが彼女と戀におちたことを知つたから……」と。

Webbs and their work, 1948, P. 13.

(註2) Beatrice: Our partnership, 1948, P. 12.

(註3) エニークな著作「英國における社會主義」には、都市社會主義に對する彼の抱負が生き生きと書かれてゐる。

(註4) 一九二八年ウェットプはその當時について次のように言つてゐる。「十九世紀の最後の十年間、ロンドンにおいて

經濟學の教授と研究がいかに小さかつたかを今日考えるとき、驚くほかはない。キングス・カレッジは中止された名目上の教授席を保有してゐた。フォックススウェル教授は大學のカレッジでポストを有してゐたが學生は二十人程しかおらず、しかも半分は有色人種であつた。わたしがかつて青年時代に出席したことのある基礎講座はパーベックカレッジで年々行われたが、それはスコットランドの全人口に比敵する英帝國の首都ロンドンに存在した唯一のものであつた」と。

M. Cole, Beatrice Webb, P. 79.

(註5) 自由主義者にして帝國主義者であつたホールデインは、その思想的な相違はともあれウェットプ夫妻の終生の友であつた。このことは「われらの協同生活」の中に明らかであるが、彼は一九二四年の労働黨内閣には蔵相となり、晩年には著るしく労働黨に近づいた。

(註6) この法律は次のようなことを規定してゐる。(1)州立中等學校の制度をはじめること。(2)舊學務委員の手から一般初等教育の管理をうつすこと。(3)宗教によつて行われる學校への公金の授與を再規定することによつて、初等教育の上に二重制度を確立すること。

六

ベアトリスは一八九三年すなわち結婚の翌年、フェビヤン

シドニー・ウェットプ夫妻その生涯と業績

協會に入會したけれども、まだシドニーの内助者であるにすぎなかつた。しかしながら、一八九五年「婦人労働の國家取締」

(State Regulation of Women's Labour) という彼女の論文は政府の注目するところとなり、救貧法委員を依頼されてより、ベアトリスの公の生活がはじまつた。一方労働黨の前身としての労働代表委員會は一九〇〇年に創建されて以來著實な進歩を示し、一九〇六年には三十人の労働者代表が議會に送られた。だがタッフ・ヴェール事件とオスボーンの判決とは、しばしば労働運動を危殆に瀕せしめ、自由保守兩黨のこの新しく下から上つた勢力に對する挑戦ははげしかつた。そしてボア戦争がもたらした一時的な興奮がさめたとき、大衆の貧困と失業の陰影が再びさし始めた。しかもそれは失業と貧困とがもはや個人の罪ではなく、社會制度の缺陷にともなう現象であることを當時の人々に知らしめた。このような状態のもとに一九〇五年、失業労働者條令が制定され、救貧法委員會が生れたのである。

救貧法委員會はジョージ・ハミルトン卿が委員長となり、六人の慈善組織委員、九人の官吏と四人の教會代表者二人の經濟學者、又労働代表として、ジョージ・ランズベリ、フランシス・チャンドラーが出席してつくりられ、ベアトリスとともにチャールズ・ブリスもその一員であつたが、ブリスは健康上の理由でやめなければならなかつた。救貧法委員會は先づ慈善組織委



員會によつて示唆された最初の調査、「賃金及び雇用條件に關する院外救助の影響」を二年間にわたつて行いその範圍は全國に及んだのであるが、何よりもその結果は人々を驚かせた。そして特にロンドンにおける婦人の賃金の調査は印象的であつた。われわれはここで救貧法についてその歴史的な意味を考へなければならぬのであるが、何れにしても一八三四年以來の救貧法が社會構造の變化に伴つてもはや新しい時代に適應し得なくなつたことは事實であつた。すなわち大衆の貧困が彼等自身の意圖によるよりも、むしろ社會制度の缺陷によるものである以上、貧困の防止はひとり救貧局にまかせておくべきでなく、それは廢止されるべきものであつた。そしてこの點については委員の意見は一致していた。だがこの時既にベアトリスは他の多くの委員が次第に自分から離れつつあるのを意識した。委員たちの多くは救貧局を廢止してその代りに公共扶助委員會を設立し注目すべきことはこれによつて身體障害者・疾病者・子供・不具者・精神異常者及び老廢者などの働けない人々に對する扶助を行うことを提案した。これがいわゆる「多數者の報告書」である。これに對してベアトリスは、ジョージ・ラズベリ、F・H・チャンドラー、R・ウェイクフィールドの援助を得て「少數者の報告書」を起草しつゝあつた。

ベアトリスを中心として作られた「少數者の報告書」が「多數者の報告書」と根本的に異なるところは、それが何よりも

身體健全な者の失業を他の異つた理由による就業不能とはつきり區別した點にあつた。かくして疾病者は公衆健康委員會へ子供は教育委員會へ、精神缺陷者は保護委員會へそして老廢者は各地方自治體の年金委員會へ、一方失業者はこれらと同一視しえないものである以上、政府によつて根本的な防止と對策とがたてられねばならぬことを強調した。まことに貧困の防止こそは、「少數者報告書」を一貫して流れる精神であつた。すなわち「多數者報告書」は貧困が個人の責任であるという思想を固持したのに反し、それはあくまでも社會的責任を強調し、貧困の治療(Off)よりも防止(Prevention)こそ必要であると力説する。人間は種々の原因から貧困におそわれる。老齡から病氣から不慮の事件から精神的な病からそして家族扶養者の死亡から……これが對策として國家年金制度・地方自治體による醫療及び教育事業・子供及び病者者のための援助・最低賃金の確保・失業對策としての公共事業などを主張した「少數者報告書」は一九〇九年失業者が既に百萬をこえるに至つてその反響はけだし大であつた。そして完全雇用・國家醫療制度・國民最低賃金の問題がようやくやかましくなつた。それにもかからず一般國民のこの「少數者報告書」に對する關心はうすかつた。あたかもジョン・ブライトやリチャード・コブデンの反穀物法運動の如くにベアトリスは同志とともに喧傳し、「少數者報告書」を立法化させるために全力をつくした。すなわち多くの反對を

おしきつて「少數者報告書」の廉價版を出し、二年後には三萬部の賣行きを示したが、更にこれを徹底せしめるために救貧法破棄國民委員會を結成し、のちにそれは貧困防止國民委員會となつたのである。

ウェッジ夫妻の「少數者報告書」の普及のためにつくした努力は、自由保守兩黨を通じてかれらの名を著名にし、一九一〇年の十月から翌年の二月までウェッジ夫妻の講演は實に百回に及んだ。そしてその機關紙「十字軍」による喧傳はようやく政府の注目するところとなり一九一一年の夏ロンドンにおいて「貧困防止國民會議」が四日間にあつて開かれ、アーサー・バルフォア、ラムゼー・マクドナルドなどによつて眞剣な討議が行われた。また一九一二年第二回の國民會議が開かれ一九一三年には、機關紙「十字軍」は新に「ザ・ニュー・ステーツマン」となり、一九〇九年以來自由黨政府はこの「少數者報告書」をその政策としてとり入れるに至つた。この「少數者報告書」が三十五年後ビーズリッジによる社會保障法案となつたことは周知の事實であるが、第一次大戦の勃發はこの問題を前後に見送らせた。

(註1) タップ・ヴェール鐵道勞働組合は一九〇一年ストライキを行った時、雇主側は組合側が會社に與えた損害に對し賠償を支拂うべきであると主張し、しかも二萬三千ポンドの賠償をすべしというおどろくべき判決が下された事件であ

シドニー・ウェッジ夫妻の生涯と業績

る。又オスボーンの判決とは自由黨員であり、勞働黨員であつた鐵道従業員合同協會の書記オスボーンが勞働黨を裏切つて勞働組合の資金を政治的な目的に用いることに反對したとき、それは上院において正しいと判決された。この二つの事件は一時勞働運動を危機に追いやつた。

(註2) トム・ジョーンズ以下この調査に参加した多くの人はその結論を次のようにのべている。「苦汗勞働の根本的な原因は、貧困、家庭的な不幸、更に勞働者の肉體的な虚弱であつて、これらの原因が正常な賃金をうることをできなくしている。低賃金はたえず低所得となり、それによつて不道徳な社會ができ上る……」と。

(註3) また婦人の賃金については、「われわれの探求は次のようなことを信じさせた。院外救助は多くの害悪を一層強くする反面、それ自體では今作用しつゝある他の要素に比較するならば、大して重要ではない。そして院外救助の廢止は、ロンドンにおける婦人の賃金水準をあげることにはならないであらう」と。

(註4) ベアトリスはその日記に次のように書いてある。「わたし達同僚の委員に對する私の關係は全く愉快である。私は全く彼等から孤立している。しかも最も氣持のよい條件で……制度においても政策においても改革の方針は次第に私に明らかになりつつある。私がそれを自分の報告書の中に



具體化するが、全委員と協調するために私の案の一部をあきらめねばならぬかどうかは、方法とデリケートな交渉の問題となるであろう。それについては現在何も豫測し得ない」。

Our Partnership; P. 349.

(註5) いわゆる「少数者報告書」の内容についてはウェット夫妻の共著 The Break-up of the Poor Law, 1909, 及び The Prevention of Destitution, 1912, をくわしむ。

七

一九二一年六月から一九二二年の四月までウェット夫妻は再度の世界旅行に出かけた。そしてカナダを経由して日本にたちより、スラム街を視察したが悪臭を放たなかつたともらしたといわれる。更に支那、インドを経て歸國したが、この旅行が後進國殊にアジア諸地域の社會状態の視察を目的としたものであることは明らかである。さてひるがえつて二十世紀初頭英國の政治は多くの問題で混乱していた。すなわち婦人參政權の問題・救貧法問題・陸軍將校の命令拒否、更に一九一三年ダブリンにおける大ストライキなどであつて特にドイツ軍國主義の勃興は、當時の微妙な國際形勢に波紋をなげかけるに至つた。しかもこのような不安の空氣の中に、わが労働代表委員會は一九〇六年労働黨となつてその面目を新にした。だがダップ・ヴェール事件やオスボーンの判決などの試験にからくも耐え得たとは

いえ、労働黨の前途は樂觀を許さなかつた。われわれは今ここで労働黨の初期の歴史についてくわしくふれる餘地はないので省略するが、要するに労働黨の危機が外部からの壓力と同時に内部的な不安とも大きな關係があつたことは想像に難くない。そこでその一つとしてフェビヤン協會内部の葛藤について少しくふれてみたい。

フェビヤン協會は一八八〇年代その創立とともに著々と發展をとげ、會員數は一九〇四年わづかに七三〇人であつたものが、一九〇八年にはおよそ二千人に増大し、第一次大戦直前には四千人をこえる社會主義團體として發展していった。またフェビヤン論集とフェビヤン社會主義論集の發行は非常な歡迎を受け、特に後者は一九二〇年までに五萬部を賣りつくしたといわれている。いうまでもなくそのかげにはウェット夫妻、G・B・ジョー、シドニー・オリヴィア、グラハム・ウォーラスの並々ならぬ努力があつたことを忘れてはならないが、フェビヤン協會は獨立労働黨・英國社會黨とともに労働黨を形づくる大きな支柱となつていた。それが思想的な統一性をもつ團體ではなかつたことは既に述べたところであるが、とりわけ無政府主義とサンデイカリズムの影響は根強かつた。すなわちH・G・ウルズの無政府主義的傾向は一九〇六年に發行された「フェビヤンの缺點」とともにあきらかとなり、一九〇八年ウェルズが執行委員に選出されるや、フェビヤン協會の運営をめぐつてウ

エツプ夫妻と見解を異にし、ついにその年の秋フェビヤン協會を脱退した。その後ウェルズはその著「新マキャベリ」においてウェット夫妻を諷刺し、感情的なもつれが容易にとけなかつた。また事實無政府主義とサンデイカリズムとはアメリカ、オーストリアなどから當時の労働運動に浸透しつつあつた。このようにしてフェビヤン協會の内部に反對の叫びがおこるとともに、一方労働運動そのものにも理論的な反省を要求する聲がたかまつてきた。G・D・H・コールのギルド社會主義運動がこれである。

コールを中心としてA・ペンティ、S・G・ホブソン、A・R・オリッジなどのギルド社會主義者は、サンデイカリズムの影響をうけてウェット等の集産主義國家社會主義に反對し、「労働者による産業の管理」をとえ、ついにコールはフェビヤン協會を去るのであるが、このような思想的な動搖は何れにしてもさげがたかつた。そして一九〇九年から一九一五年までの六年間は、ウェット夫妻は左右両面から攻撃され、従つて彼等の人氣が最も悪かつた年であつた。しかしながら英國労働黨にどつて最も大きな事件は第一次世界大戦の勃發であつて、この未曾有の大戦は、資本主義體制が既に帝國主義的段階に突入したことを意味した。そしてここにおいて主戰論と反戰論との對立が労働黨内においてやかましくなつた。それならばウェット夫妻はこの時どのような立場に立つたであらうか。傳記者マー

シドニー・ウェット夫妻の生涯と業績

ガレット・コールは、戦争の初期には彼等は大陸の社會主義者に關心をもち、彼等と戦争と平和の問題につき議論することを欲していたが、反戰運動そのものには比較的無關心であつたばかりでなく、シドニーの場合は、戦時緊急労働者國民委員會の委員となり、戦争完遂のために労働者及び社會主義者の力を結集せよとしたと述べているが、これはウェット夫妻の態度がむしろ主戰論派であつたことを示している。このような彼等の態度こそ非戰論者であつたマクドナルドと相容れるものではなかつた。後年におけるマクドナルドとの不和はすでにこの時に種がまかれた。

しかも戦争中におこる缺乏、不安、大量の殺傷と肉親の死は、彼等の心を痛ましめた。だがこのとき彼等の思想に重大な影響を及ぼしたロシア革命が起りつゝあつたことを見逃してはならない。大戦を契機としてあきらかにされた労働黨内部の對立葛藤、すなわちフェビヤン協會の後退と左派的な獨立労働黨の進出は、およそすべての社會民主主義政黨に宿命的なげしい分裂を來した。一九二二年二月、一五〇人の僚友とともに下院に選ばれたウェットは一九三一年に至るまで九年にわたつて活躍したのであるが、彼等の努力は何にも増して労働黨をもつて社會主義のためにたたかう戦斗的な政黨たらしめ、更に保守政黨に對する積極的な浸透政策を行うために注がれた。それにもかかわらず彼等の努力は報いられなかつた。戦後の社會的な混亂

と經濟的な矛盾は資本主義文明の崩壊がもはや争うことのできない現實であることを示すとともに、他方労働黨政府の前途は苦難にみちて、正に日暮れて道遠き感があつたからである。一九二四年第一次労働黨内閣の成立とともに商務大臣となり、また一九二九年第二次労働黨内閣において植民大臣となつたウェットは激務に耐えるためにバスフィールドに閉靜な土地を求めて養生していたが、彼等はすでによる年波の淋しさを感じはじめた。一九二三年の著「資本主義文明の崩壊」は彼等の漸進主義、社會民主主義への信念を吐露したものとして有名であるが、ベアトリスは一九二六年「わが修業時代」を世に問うた。すでに一九二七年「英國救貧法史」を著わし一九二九年に他の二巻の續篇を出してからは、彼等は一應肩の荷を下すことができた。そして一九二七年から二八年にかけて地方政治の實地研究のために各地を旅行した。彼等はもはや老年に入りつつあるのを感じた。しかしながら尨大な著述と社會的な活動によつて當時相當に名をなしていたウェット夫妻も、今日われわれが想像するよりの意味では決してその業績を評價されてはいなかつた。このことはあのJ・A・ホブソンについても言えるであらう。だがシドニーはしばしばB・B・Cから呼ばれて放送し、又英國學士委員会はベアトリスを唯一人の女性會員とする榮譽を興え、又一九二八年にはロンドンスクール・オブ・エコノミックスのウィリヤム・ニコルソンはその建設者をたたえて、その肖像

像を畫かせた如きは、彼等のわづかにはなやかな生活の一片であつた。老境に入るにつれてベアトリスはシドニーから離れると常にさびしがつた。彼女自身子供をもたず又もつことを欲しなかつたのだが、晩年になつてはさすがに耐えきれず、甥や姪を非常に愛した。そして淋しさにまけて親戚は勿論、政治的に全く意見の合わない人々の來訪をさえ喜んだといわれる。だがわれわれはこのかげに彼女の英國労働黨の前途に對する不安がやつていたことを忘れてはならない。彼女は一九二五年の労働組合會議を支配していた左翼的な労働組合主義に反對であつた。右によりやくファシズムの波がたかまり、左に共產主義の著實な發展は英國社會主義の前途に不安とおどろきをもたらしつつあつた。資本主義の矛盾がよりやくおおい難い程たかまつた一九二九年は、労働黨政府の失敗が金融政策と失業對策の破綻となつてあらわれはじめた。その結果マクドナルド等の自由主義への轉向という裏切行爲によつて労働黨は後退するのやむなきに至るのであるが、労働黨がこのように一進一退を繰り返している間に、ソヴェットにおいては一九二七年以來第一次五年計劃が採用され、積極的な社會主義建設の時代に入つていた。十九世紀に生れ二十世紀に人となつた多くの人々と同じく、ウェット夫妻もロシア革命にはげしい憎惡の感情を抱いてい

た。既にフェビヤン協會内部におけるサンディカリズムとの葛藤によつて苦い經驗をなめた彼等がロシア革命をもつて無政府主義者とサンディカリストの仕業であるとしたのは理解出來よう。だが一九二〇年代いわゆる新經濟政策の時代のソヴェットに對しては極めて批判的であつたベアトリスも、一九三〇年代労働黨の危機以來ソヴェットに對する關心を強める動機となつた。

- (註1) ウェット夫妻は都會は勿論、長野縣、新潟縣などの農村を旅行して社會状態を觀察したが、その際わが慶應義塾に立ちよつて講演を試みたことは記憶されねばならない。
- (註2) 労働黨の歴史については、昨年度經濟評論五月號、三田學會雜誌六月號の拙稿を参照されたい。
- (註3) ゴルド社會主義とコールについては、前掲經濟評論の拙稿を参照されたい。
- (註4) ウェルズもコールも後にウェット夫妻と和解するものであるが、ウェット夫妻にも缺點があつたことはいうまでもなく。
- (註5) M. Cole; Beatrice Webb, 1948, P. 128.
- (註6) ベアトリスは二巻の自敘傳の上に、更に二巻を計劃したのであるが、果さなかつた。

八

シドニー・ウェット夫妻その生涯と業績

ウェット夫妻をしてソヴェットに關心を抱かせ、ソヴェット旅行をくだでさせる動機となつたものは色々あろうけれども、特にフィリップ・ブライスの「ロシア革命の追憶」やW・H・チェインバレンの著書の影響も大きかつた。その當時ソヴェットは一つには喧傳のためにそして又外貨獲得のために外國の名士の招待に非常に熱心であつたため、ウェット夫妻には既に幾度となくソヴェット旅行の機会がおとづれた。一九三一年ロンドン駐在のソヴェット大使ソコルニコフは、親しくウェット夫妻を訪れ、しきりにすすめてやまなかつた。かねて未知の天地、驚異の大陸として異常な好奇心を抱いていたベアトリスは、シドニーを説いてソヴェット旅行を決心させた。彼等の申し込みが改めて受理されるや、ベアトリスはソヴェットに關係ある著書を読み讀んだ。そして冬の間に準備をととのえて、一九三二年五月當時七十四歳と七十五歳の白髮の老夫妻は一人の通譯を伴つて社會主義の聖地ソヴェットへの旅にのぼつた。一九三〇年代のソヴェットはすでにレーニンの時代はすぎ、スターリンの五ヶ年計畫が西歐知識人の興味をひく話題となつていた。一九二九年迫り來る世界大恐慌の中に、ソヴェットは著々とその事業をしとげ、資本主義陣營の推測を裏切つて、固定資本財の蓄積による擴大再生産は、社會主義に關する從來までの俗説を權威なきものとした。ソヴェット共產主義に對するその當時の論争の中にあつて、ウェット夫妻とフェビヤン主義者



とは自らの眼をもつて眞實を見ようとした。そしてソヴェイト政府は、その困難な状態にもかかわらず未來の成長を確信して訪問者を歓迎したのである。

しかしながら英國労働黨の重鎮としてのウェット夫妻は特別の訪客であつた。既にレーニンが流亡中、「労働組合運動史」をロシア語に譯して以來、ウェット夫妻の名は廣く共産黨員の間に知られていた。又それなればこそ、ソヴェイトの制度の正しさを彼等に認識させる必要があつた。一九三二年五月二十五日レーニンがラドに到着した彼等は、ソ連の外務部に迎えられる消費組合の代表者達に会い、それからモスコでリトヴィノフなどの首脳と懇談し、母子會館とモスコ劇場の訪問から最初の視察を始めた。それから大工業地帯ノヴォゴロドを經由してスターリングラードに到着、そこで大規模なトラクター工場を見學し、更にロストフにおいて國營農場を視察した。しかしこの強行された視察旅行のためにベアトリスはロストフで病氣になつたのでシドニーは單身ウクライナ地方へ入り、カールコフ及びドニエプロストロイを視察して六月の末モスコからレーニングラードを經由して歸英した。彼等の見聞の範圍は必ずしも廣い範圍のものではなかつた。彼等は極東や中央アジア、更に戦時中大工業地帯として知られたウラル地方にまで入るゝとはしなかつた。彼等の旅行範圍はヴォルガの西部で、いわゆるヨーロッパ・ロシアに限られていたが、ソヴェイトの農業に強

い關心をもち、至る所で人民の聲を聞こうとした。彼等はいわば國賓としての待遇をうけていたので、他の人ならば許されないう特權をうけた。即ちどこへでも行くことはできたけれども、唯一つ共産黨中央執行委員會に出席できないのを残念に思つた。一九三二年八月彼等は老大な資料を抱いて歸英したがこれは普通の人ならばその一生にも値する程のものであつたにもかかわらず、共同研究の結果、一九三三年には既に新しい大著の構想ができて上つていた。そしてその成果は一九三五年、「ソヴェイト・共産主義——新しい文明」(Soviet Communism. A New Civilization, 1935, 2 vols.)三巻となつてあらわれたのである。ウェット夫妻がこの旅行によつて何を得たかは、この大著の中に細大もらさず書かれてはいるが、何れにせよ彼等がそこに「新しい文明」がたくましく成長しつつあるのを發見したのは事實であつた。

一九三四年シドニーは再びソヴェイトをおとづれる機會を得たが、丁度その時はやがて一九三六年のスターリン憲法となつて實を結ぶべき政治的寛容の新しい時代が始つていた。この度の旅行はむづかにモスコとレーニングラードに限られていたけれども、五ヶ年計劃の成果は見るべきものがあつた。まことにウェット夫妻はソヴェイト・ロシアと戀におちた。彼等はそこに新しい文明の出現——社會主義者の夢の實現を認めた。完全雇用、缺乏からの解放、生産水準の上昇、婦人參政權、衛生及び

教育施設の充實、映畫音楽の普及、すべてのものが深甚な影響を與えた。しかも彼等の心境の著るしい變化は、ソヴェイト・デモクラシーの認識によつて益々深められた。かつてデモクラシーの敵として嫌つた「黨獨裁制」も、ソヴェイトにおいては必然的な運命であることを知つた。ソヴェイトに對する熱情をもつて自ら「老いらくの戀」になぞらえた彼等は西歐デモクラシーの運命が次第に衰えつつあるのを認めないわけにはゆかなかつた。一九三四年ヒットラーの大統領就任以來、ナチス・ドイツの攻勢はたかまり、西歐陣營の間に不安のきざしがあらわれたとき、西歐デモクラシーの敵はソヴェイトではなく、ナチス・ドイツであることを知つた。しかしまたそれだけに一九三九年の獨ソ不可侵條約はウェット夫妻にとつて意外なショックであつた。が歴史はソヴェイトの強さと正しさを證明した。彼等は實にこのとき既にやがて来るであろうソヴェイト共産主義とアメリカ資本主義との宿命的な對決を豫見したのである。そして「共産主義は擴大するか」の間に對し、「然り」と答へたといわれる。

(註1) 一九一八年「ブラッダ」の編集者がウェット夫妻にソヴェイト見學をすすめて拒絶されたといわれる。

(註2) わが國では小泉信三氏が、つとにこの大著の書評や隨筆を書いておられる。三田學會雜誌二十七卷第六號、讀書

雜誌(昭和二十三年文藝春秋社)

シドニー・ウェット夫妻の生涯と業績

(註3) シドニーは工場、農場、協同賣店、學校、病院その他の公共施設を視察し、その完備に驚嘆して同伴者ブレイクに「See, see, it works, it works.」と語つたといわれ、*See, Wechs and their work, P. 227.*

(註4) 彼等は「ソヴェイト・共産主義」の副題「新しい文明」の?を再版のとき削除した。

(註5) *M. Cole, ibid., pp. 229-230.*

九

ソヴェイト旅行を終えてからのウェット夫妻は、バスフィールドの森にこもつて讀書と討論と著述に時を過した。そして時には友人との、長い内容のある談話が夜までつづくこともあつた。ソヴェイトについてだけでなくその談話はあらゆる方面に及び、その傍で夫人が暖爐に手をかざしながら、彼女の家族について、或は結婚の日の思い出について、更に又「われらが協同生活」の中にでてくる色々な事件についてしみじみと語るのを入々はきくことができた。彼等の愛情は世の夫婦の愛情と何ら變るものではなかつた。彼等は二、三日でさえ離れることを好まなかつたからである。生前ウェット夫妻と親交のあつたキングスレー・マートインの語るところによれば、「シドニーは文學や藝術にはうとかつたけれども鋭い理性の人であつたし、また純眞素朴でまた非常に親切であつた。この點ベアトリス

の貴族的な臭味と趣を異にしているが、何と言つても人間としてのシドニーの魅力は、無關心ともいへべき寛大さであつた。もし英國社會史にシドニーに近い人を見出そうとすれば、それはジェレミー・ベンサムである」と(註1)。

シドニー・ウェップとジェレミー・ベンサムとがどのような共通點をもっているかは別の問題であるが、何れにせよ彼等が英國社會史に與えた影響とその残した業績とはベンサムに優るとも劣らなかつたであらう。ベアトリスは、一九四三年八四歳の高齡をもつて第二次大戦の勝利を見ずに死去したが、以來シドニーの健康もとみに衰え、一九四七年十月、八十八歳をもつてその多忙な生涯を終えた。後にバーナード・ショーの提議により、夫妻の遺骸はウェストミンスター寺院に葬られ、そして勞働黨はウェップ夫妻に對し心からなる哀悼の言葉をおくつたといわれる。

以上筆者はウェップ夫妻の八十年以上にわたる生涯を概観してきたが、彼等がその全生涯を通じて社會主義のために寢食を忘れて献身したその努力もさることながら、人間としての彼等の偉大さは何よりもその良心的な態度と眞實に對するあくことのない探求心であつた。國家社會主義者としてのウェップ夫妻が、ソヴェートの共產主義に與えた讚美はむしろ當然であるとしても、問題は彼等がこれをもつて正に「崩壊に近づきつつあ

る資本主義文明」に對して「新しい文明」であると認めたところにある……、だが彼等は幸福であつた。社會主義者が少くとも世界を變革するための哲學である以上、社會主義者の多くは迫害と苦難と失望の中に人知れず死ぬのを常としたとすれば、彼等の生涯は實に例外ではなかつたか。シドニーとベアトリスとのまれに見る結合は、思想史家にとつてカール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルズのその如く興味ある事實ではある。しかし愛妻イェンミーとともにロンドン寓居で貧苦と失望のうちに淋しくその一生を終えたマルクス夫妻の生涯と、晩年にはバスフィールド卿として貴族に列せられたウェップ夫妻とを比較して、人々はそこに何ものかを感じるであらう。ともあれ今はただウェップ研究のための最初の試みとしてこのオピチュアリーを終ることにする。

(註1) だがベアトリスはシドニーが貴族の稱號をうけるのを猛烈に反對したのは印象的であらう。

(註2) Webs and their work by M. Cole; 285.

### 王領植民地下の

#### マサチューセッツ財政

金丸平八

樞府拓商務委員(註1)の設置(一六七五年)に伴ひ、イギリスの植民地政策は、帝國主義的色彩を以て覆はれてしまつた。チャールズ二世によつて企圖されたマサチューセッツ植民地(以下マサ植民地と稱する)の特許狀に對する攻撃は、その具體的な表現と見ることが出来る。即ち、一六八三年の Quo-Warranto 令(註2) ArieFasis 令(註3)に基き、大法官廳は閣席裁判によつて一六八四年十月十三日特許狀の無効を宣言したのである。かくてマサ植民地は特許植民地としての地位を喪失し、半世紀餘に亘る歴史に一應の終止符を打たねばならなかつた。

この新たな、然も重大な局面に臨み、マサ植民地は、何等の抗争手段も採り得なかつた。商業的發展に伴ふ商人層の擡頭は、マサ植民地の階級構造を根底より動搖せしめてゐたのである。然も、彼等商人層の保守的傾向は、武力抗争に反對の態度を明示してゐた。この内的變革に加へて、王領ニュー・ヨーク及びフランス植民地の發展は、新英領に於けるマサ植民地の地位を相

王領植民地下のマサチューセッツ財政

對的に弱化せしめるものであつた(註4)。人々は、嘗つて西印度諸島の辿つた運命に想ひを馳せ、憂慮の念を抱きつつも、本國の措置に従ふ以外に途のないことを知つたのである。

マサ植民地の不安を餘所に、ゼームス二世は、先王の政策を強力に展開すべく決意した。この意圖に基いて、アンドロス(St Edmund Andros)の新英領總督就任(一六八六年)は實現されたのである。彼の任務は、重商主義的經濟體制の強化―特に航海條例の嚴守―と共に、活潑化したフランスの動きに對應せんとする軍事的目的をも含んでゐた。その意味に於て、チャールズ及びクラレンドン(Edward Hyde Clarendon)の政策より一歩前進したものと云ふことが出来る。然し、アンドロス政權は成立當初より幾多の矛盾を内包してゐた。彼の統治下に置かれた各植民地の理想・歴史・傳統等の相違は、反抗を醸成する最大の要素となつたのである。従つて、マサ植民地が一貫して、急進的反逆者としての態度を維持したのも、當然の勢といふ外はない。マサ植民地の支配者達は、彼を目して、聖なる理想を破壊し、自由を蹂躪するものとなした。一般民衆すら免役地代の徴收に對しては一齊に怨嗟の聲をあげたのである。エセツクス( Essex )の各タウンが納税拒否の態度に出たのも、この事情を反映した一例に過ぎない。かくて、マサ植民地とアンドロス政權との確執は、激化の一途を辿つて行つた。兩者の全面的衝突は、最早や時間の問題に過ぎなかつた。